から、ランのコミューン運動に関する部分をJ・ベントンの英語版から抄訳した史料紹介とが収められている。

続いて第二部ではベルギーの中世都市に入るが、第一章では、主にA・フルヒュルストの業績によりながら、フランドルの発掘調査の結果から中世都市の起源と発展を論じている。ここでは古代からの連続性をもつ前都市的核が中心地機能を果たし、後の都市発展に一定の意義を持ったことが示されている。

第二章・第三章は一転して政治史が扱われており、どちらもフランドル伯シャルルの書記官であったガルベール・ド・ブリュージュの記述になる同時代史料をもとにしている。第二章ではフランドル伯暗殺をめぐって、支配者とその不自由家士一族であるエランバルド一族との関係を考察している。不自由家士をめぐる問題の重要性は守山氏御自身も指摘しておられるが、本書においてはほぼ政変とその前後の事件史的叙述に尽きているようである。第三章では伯暗殺後の相続争い、フランス国王ルイ六世と貴族たちの動向、市民階級の勢力高揚などに焦点を合わせ、一二世紀初期のフランドルにおける政治的変動について考察しているが、特に政変に関与した大貴族の動向と市民階級の重要性を指摘している。政変後、即位した伯は諸都市の好意を得るため特許状を与えているが、サン・トメールの特許状について本文中に多くの条項が紹介され、市民階級の勢力高揚を指摘している。

最後に感想を一言述べさせて頂きたい。本章は同時代史料の抄訳も合わせて収録され、北フランス・ベルギーのコミューン史概観としてよくまとまった一冊であろう。しかしながら、初出以来長い時間の経過した論文も収録されているため、論文集としての出版に際しては現在の研究動向についても付け加えて言及していただきたかった。さらに、北フランス・ベルギーという一定の領域を扱うに際して、氏は個別都市をコミューンの全体的特徴を得るための素材・データとして検討しておられるが、挙げられている内容の中には、コミューンの特質の一般化に利用するだけでなく、カンブレーのコミューン闘争の北フランス一帯に対する影響や、都市間での情報交換、カペー王権との関連、プランシポーテとの関連など、諸都市及び諸権力の結びつき・相互関連から領域全体の把握を可能にする要素も含まれているように思われる。今後の研究成果に期待したいが、その際には個別都市の検討法の整理や、教会・国王・世俗領主といった既存権力間の相互関係の一層の明確化などが望まれるのではないだろうか。

（A5判　三八五頁　一九九五年十一月
近代文藝社　二九〇〇円）
（佐藤公美　京都大学大学院生）

樺山紘一著
『西洋中世像の革新』

本書は、過去東京大学において城戸毅教授に学恩を負った、一七名の中世史研究者の共同論集である。同教授の還暦記念の意図もそこに込められている。『西洋中世像の革新』と題された本書の狙いは、冒頭で編者の樺山氏によって説明されている。まず、かつて中世史研究者が立ち向かってきた「暗黒の中世」像をめぐる近代国家の中世起源説や一二世紀ルネサンス論など中世と近代をめぐる論点から、社会史そして歴史人類学などへの視点の移動が概観され、歴史的ダイナミズムを捉えうる視点が今な

お模索されるべきことが述べられる。そして、つぎにこうした視点の移動が必然的にもたらすところの主題の変容がふりかえられる。政治・経済的機構に関する図式の変容、社会的結合関係にまつわる主題の登場、文化・思想的分野における問題の広がり、そして従来無視されがちだった地域の研究などが取り上げられるが、こうした多用な主題が歴史像の全体性をよく保証しえているのかは、なお反問さるべきとされる。城戸教授とともに本書の研究者たちが歩んだ二十数年間がこうした「革新」の時期に相当するとされるわけであるが、この序文はそのまま本書の多彩な内容を保証し、統一感を与える役割を果たしている。以下、各論考について個別に見てゆきたい。

第一部は『王権と貴族』と題され、六本の論文が収録されている。まず初めは、渡辺節夫「フランス中世中期における貴族制と親族関係――シャンパーニュ地域の事例について」である。この論文においては、シャンパーニュ地方における一二・一三世紀のバゾッシュ城主家および、一一・一二世紀の領主層の親族関係について検討が加えられ、中世中期シャンパーニュにおいては中小貴族層が父兄制原理に基づいた血縁集団を形成し、家系の利益および権力確保の基盤となしていたことがしめされる。

つぎに高山博「ノルマン・シチリア王国のアミーラトゥス―ノルマン行政の頂点にたつアラブ官職」がくる。一一世紀後半から一二世紀末のシチリア王国成立前あるいは成立後において、アラビア語起源の称号アミーラトゥスが政治状況に応じ、イスラム教徒を管理するパレルモの地方役人からしだいに強力な権威をもつ高級官職、ついにはその名誉的称号あるいは国王艦隊の指揮官という固有の意味合いをもつに至ったことが述べられる。

ついで甚野尚志「ソールズベリのジョンの暴君論」である。ジョン研究においてもっとも関心を集める暴君放伐論について、ジョンが無条件に暴君放伐を唱えたのではないとしながら、むしろ古典およびローマ法の再生という一二世紀の知的状況を背景にした暴君および暴君殺害に関する分析提示がジョンの最大の功績であるとする。加えて、ジョンのいう暴君論は同時代の複数の君主に刺激されたものであることもしめす。

有光秀行「ジェラード・オヴ・ウェイルズのウェイルズ、そしてアイルランド」は一二世紀後半から一三世紀の聖職者・著述家のジェラードの諸著作の分析を通じて、その地誌的記述から読み取れる、ジェラードのイングランド、ウェイルズとの結びつきに関する民族意識的表れや、そのアイルランド観と『東』そして『西』観念との関わりなどが指摘されている。

池谷文夫「ロエスのアレクサンダーと一三世紀の帝権移転論」は、長期の皇帝不在やイタリアにおけるフランス勢力の伸張といった一三世紀後半のドイツ、フランス、そして教皇庁をめぐる政治状況の中にアレクサンダーの帝権移転論を位置づけることによって、そのドイツ擁護的立場の本質を明らかにする。

第一部の最後は、鈴木広和「一四世紀ハンガリーの国王収入についての一考察――鉱山と貨幣」である。ヨーロッパの金相場にも大きな影響をもったハンガリーの財政について、国王造幣所に関する資料を用いて分析し、造幣所長官の働きやそれを支える国内統治の安定などによって国王収入の増加がもたらされたことを指摘する。

第二部の『教会と修道院』は四つの論文からなる。まず、藤田なち子「一三世紀エクセンプラにおける告解の問題」は、一三世紀に義務づけられることになった告解へ信徒を導くのに説教は有効であったが、その説教に導入されたエクセンプラの代表的な集成を四つ検討する。そして、教化的性格が時代を追って強化されたこと、また各々のエクセンプラはそれぞれのおかれた状況下で検討されるべきことがしめされる。

つぎに、堀越宏一「鉄をつくる修道士たち――中世フランスの修道院における製鉄経営」は、一三世紀に転換期を迎えるフランスの製鉄について、ロレーヌ地方の史料を検討し他地方との比較を行いながら、世俗領主との関係において、修道院の鉄生産が一三世紀の製鉄をめぐる一連の変化のなかで消滅に導かれた過程を描く。

島田勇「一五四一年のレーゲンスブルク帝国議会における宗教討論について」は、とくに一五四一年およびそれ以前の宗教討論を扱い、表題の議会討論に提出された文書の残存テキストの状況と作成過程、それの唱える二重義認説の立場をとるガスパロ・コンタリーニをめぐる状況、そして同文書の秘蹟論にかんするカトリック、プロテスタントの見解について検討する。

そして、細川滋「一六世紀半ばのヨシフ＝ヴォロコラムスキー修道院領における雇用労働力について」においては、土地台帳・支出帳簿を史料として用い、報酬を意味するであろうオブロークの授受にまつわる職種、額、受領者数の推移、また修道院と受領関係をもつ意味の検討などを通して修道院側の労働力利用における方向転換、オブローク受領者側の有利などを読み取る。

つづいて第三部は『都市と社会』というタイトルの下に六本の論文が収められている。初めは、相澤隆「ドイツ中世都市における街並みの形成と建築条令」であるが、この論文では中世後期の上ドイツの帝国都市を考察の対象とし、十分に検討されてこなかった都市の建築条例とそれが都市の発展に果たした役割、また都市景観の発展における役割などが説明される。

河原温「中世都市ヘントの兄弟団と貧民救済――聖ヤコブ兄弟団の活動を中心に――」は、とくに聖ヤコブ兄弟団について規約・メンバーリストから成立、構成、活動を検討し、そして同兄弟団が一三世紀後半以降運営していた施療院の機能や経済的基盤を検討しつつ、都市全般との関わりにおいて位置づけ、その枠組みにおける兄弟団の政治社会的な統合的役割、貧民救済活動の果たした社会的機能やイデオロギー性を明らかにする。

つぎに、池上俊一「一三～一四世紀シェナの社会的結合関係」は家族・親族、隣り組・街区、職業、慈愛と死のそれぞれ四種の社会的結合関係が複雑な人々の関係の網目を形作るさまを描き、とくに社会的結合と感情生活に関する実証研究に重要な見取り図を提供する。

市川実穂「中世後期イングランドの都市と宗教儀礼――ノリッジの聖ジョージ・ギルドの祝祭」においては、宗教儀礼の統合的機能に疑問を呈した近年のマクリーの研究が、聖ジョージ・ギルドの宗教儀礼の実態を史料にそって見ることにより検証され、その見解に対する疑問点が提示される。

ついで、藤田朋久「汝のために神は闘えり――法廷決闘とその叙述をめぐる問題」は、七百年頃の『聖ウートリーユ伝』、一二世紀の『アンジュー伯の事蹟』の法廷決闘に関する叙述を分析し、法廷決闘とオル

ダリーをめぐる教会側の見解や社会的要請とその変遷をしめす。

最後に新井由紀夫「一五世紀のプランプトン家と結婚――イングランド北部における一ジェントリ家系の視点から」は、イングランド北部の地域政治社会とジェントリ、またその結婚の特徴を経済的・社会的点からまとめた後に、プランプトン家の結婚について分析をくわえ、結婚が家系維持において有効な働きをなしたことをしめす。

こうして本書を各論考別に見てきたが、筆者の専門・関心によって各論考にあてられた字数に差があることはお許しいただきたい。では、最後に若干の私見を述べて終りとさせて頂く。本書には、現在国内の第一線で活躍する若手・中堅研究者の論考が収められているわけであるが、各論考の質には若干のばらつきがある。もとよりこうした書物の性質上、限られた紙幅で問題設定から論証、展望までをしめすのは無理があろうし、その上でオリジナルな議論も展開しづらいだろうが、単に研究史のフォローの域を出ていないように見受けられるものもあった。しかし、逆に紙幅を考えればそれも有効なものであるかもしれないし、明確な視点のもとに的確に議論されている力作も多かった。いずれにせよ、多岐にわたるテーマでのそれぞれの最新の研究・議論、ひいては最新の中世史研究のありかたといったものまでをカバーしたいと願う研究者および読者にとって、本書は有益なものとなろう。

（B5判　三七三頁　一九九五年九月
刀水書房　七九三一円）

（宮谷秀紀　京都大学大学院生）

受贈図書

（一九九六年三月二二日～
一九九六年六月一〇日）

文化学年報（同志社大学文化学会）　四五

一橋論叢（一橋大学一橋学会）　一一五―三、四、五

人文地理（人文地理学会）　四八―一

文献ジャーナル（富士短期大学出版部）　三五―六

人文科学論集（信州大学人文学部　人間情報学科編）　三〇

人文科学論集（信州大学人文学部　文化コミュニケーション学科編）　三〇

地域史研究はこだて（函館中央編さん室）　二三

総合研究所報（福岡大学総合研究所）　一一二（人文科学編一一七）

東京商船大学研究報告　人文科学（東京商船大学）　四六

古脊椎動物学報（中国科学院　古脊椎動物与古人類研究所）　三三―一、四

人文論叢（福岡大学総合研究所）　二七―四

駿台史学（駿台史学会）　九六、九七